

東京バッハ合唱団 月報

[第705号] 2021年3月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.705

March 2021

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

楽譜出版の今後

カンタータまるごとの紹介に注力、アリア集出版は断念

大村 恵美子 (主宰者)

月報の前々号(1月号、No. 703)に、2022年以降は私自身の腹案として、2024年までの演奏計画を書いてみました(P.3)。それも、最近の状況悪化で、計画の手直しも已むをえないかも知れません。

長びくコロナ禍のせいで、世の中は活気を失い、特に音楽・演劇等の芸術関係のイベントは、1か所に観客を集めること自体が危険視され、正月恒例のウィーン・フィルのウィンナワルツを主体とする明るく楽しいコンサートで新年の音楽鑑賞が始まる、その伝統さえ、無聴衆の形で、テレビで紹介されました。

音楽家たちも一様に、活動場面を失い、いつ下火になるかわからない災厄のために、多くが失業・無収入状態に陥っているようです。私たちの合唱団を振り返っても、昨年末には、中止となった第119回定期演奏会の代替として、杉並区の助成(「新しい芸術鑑賞様式」と後援を得ての無聴衆上演にきりかえ、ユーチューブという初の公開形式で実施することが出来ました)が、予定して準備をなされたプロの独唱者の方々には、出演の機会を奪う結果となってしまい、はなはだ心苦しい思いでいます。

ところで、一昨年来の月報紙上でもお伝えしてきたように、半世紀以上も続けて来た私たちの、日本語によるバッハ・カンタータ演奏を、今後の人々に引き継いでもらう意味で、カンタータ作品中のアリア楽曲の名品を抽出して、独唱編と重唱編とにまとめたアリア歌曲集の出版を思い立ち、大きな期待を受けて、手をつけ始めたのですが、やはり、楽譜出版の諸過程(とくに版下製作)で、技術的にも特殊であり、労力的にも経費面でも、単価を低くおさえるのはなかなか困難だということが分かりました。

ただ日本語訳詞によるバッハ音楽演奏を、一般に広め、将来に残すためには、どうしても楽譜の形にしておかなければならないということで考えられたのですが、単価を他のものと並ぶだけの低価格にするのは、



■千葉写真館「早春編」①(次頁以降②③とも) 撮影・千葉光雄(団員)

どうしても、これまでの需要・売り上げ状態から見ても、望み得ないと判断するしかありません。合唱団員数も、最盛時期に比べて半減以下になっている現在、これ以上、団の赤字を殖やす勢いはありません。

20数年前、最初にカンタータを50曲選んで、選集として出版した時には、期待が大きく寄せられて、「各1000部ずつ出版」の声に押されて、その規準で出版しました(2000年~2004年)。実際には、カンタータ1曲全体を、編成どおりに独唱や器楽をそろえて、まるごと演奏できるほどの合唱団体が、全国中でも僅かで、教会の礼拝中に、コラール程度の簡単な合唱1曲を取り入れる、それゆえコピーで間に合わせる、というケースが大多数で、ほんの幾つかの例外をのぞき、私たちの楽譜を合唱団員全員用に揃えるまでにはならなかったようです。バッハのカンタータ音楽自体は、その後、愛好者が多くなり、CDなども売れているようですが、原曲のまま、訳詞演奏には関心が向けられず、自ら歌うために楽譜を買う層も増えません。私たちの訳詞演奏を聴いて絶賛してくださる方は僅かにあっても、それを自分の要求にとり入れる段階には至らないわけでしょうか。

今でも、私たちのところには、最初に出版した「50曲選」の楽譜(カンタータ1曲が独立した1冊の楽譜で、平均40ページほど、数百部ずつ)が山と積まれている、このうえアリア歌曲集の出版を重ねることは、もう不可能としなければなりません。夢をたくさん描

月報 2021年3月号 CONTENTS

- ・おたより(諸川春樹) …p. 2
- ・連載随想: 退屈するのはいそがしい(大野博仁) …p. 3
- ・エマオの出会い(大村恵美子) …p. 4

いて来ましたが、これ以上の負担になることは取り止めて、まだ残っている「50曲選」の楽譜、および、その後の公演に並行して出版した新規の楽譜の在庫もふくめ（既刊81曲）、独唱希望の方にも、重唱・合唱希望の方にも、お奨めするしかありません。むしろ、これが本来のあり方でもありましょう。確かに、バッハのカンタータを本格的に知るには、そこから1楽曲ずつ引き抜いて歌う前に、バッハが、それぞれのカンタータ全体でどんな呼びかけを心に抱いていたのか、先ずそれを理解する事が必要なのです。

今後は月報にも、改めて各カンタータの紹介を、連続して載せてゆきたいと思いますが、200曲もあるので、在庫のセールスという観点からも、先ずは既刊81作品を優先し（1回に数曲ずつ）、それが済んだら、その後の発行分もふくめて、未刊の作品群の紹介に進んでいけたら、と思います。かなり遠大な計画になりそうですね。おたがい、長生きしましょう。

今後も皆様のご支持をお願いいたします。

お・た・よ・り

諸川 春樹（後援会員）

コロナ禍は一向に収束の兆しが見えませんが、お元氣のことと拝察いたします。

いつぞやは「日本唱歌集」及び、その改訂版をお贈り下さり、ありがとうございます。ほとんどが馴染みの曲で懐かしく、思わず口遊んでしまいましたが、それだけではなく、「わかりにくいことばの解説一覧」はよい勉強になりました。「なるほど、そういう意味だったのですね」と何度思ったことでしょう。

その御礼を申し上げる前に、今度は立派なDVDが届きました。重ねて御礼申し上げます。早速、拝聴いたしました。すると、これも懐かしい、いつもの「清廉な」歌声が部屋の隅々に広がって行きました。隣にいらした白木先生(*)が「やっぱりバッハはいいでしょう」とおっしゃられたような……。以来、しばしば朝に拝聴しております。

また特典映像を拝見し、このコロナ禍において、いかに合唱なるものを出来る限り、適正に展開するかということにご苦労されたことがよく分かりました。ゴタゴタ続きの東京オリンピックの準備とは、好対照です。

さらにDVDに関しては、ジャケットのレイアウトがステキです。文字列の右下にきちんとピエロ作品(**)が入っています。こういうところもうれしいです。

．．．．．

昨年5月から大学の座学がすべてオンラインになり、90分の授業を文字化する作業に追われました。ひとコマに10～12時間かかります。6コマありますので、そ

れだけで1週間がつぶれる生活となり、「不要不急の外出は控えて」どころか、引きこもりの修道士として、社会から隔離されておりました。ようやく、今月の半ばに解放され、手紙を認める余裕も出てきたところです。

先日久しぶりに大学に行き、学生の皆さんにお目にかかることが出来ました。「ちゃんと読んでいました」とか、「結構面白かったです」という声に、9か月の苦勞がすっかり報われた気持ちになりました。

来年度の授業がどうなるのかは不透明ですが、バッハ合唱団を応援する気持ちには変わりありません。



これからもどうぞよろしく願いいたします。

とりあえず、御礼まで。

[注]

*) 故・白木博也氏、洋画家。合唱団創立当初より半世紀以上にわたって後援会員を継続され、2018年大晦日に他界された。諸川氏の高校時代の美術教師かつ、バッハ音楽への導きの師でも。

***) ピエロ・デルラ・フランチェスカ「キリスト降誕」のこと。諸川氏のお勧めによって、昨年暮れのオンライン特別演奏会の案内チラシに、挿画として利用させていただいた。

◆筆者・諸川氏は多摩美術大学教授。合唱団創立57周年記念講演会「バッハ音楽と西洋美術、聖母マリアを主題として」（2019年7月、荻窪教会）で、名画のスライドを紹介しながら、講師をつとめられた。「月報」第686号（2019年8月）に報告記事があります。ご参照ください。上の花束のイラストも筆者。



■千葉写真館「早春編」②

退屈するのはいそがしい [1]

大野 博人 (団友、安曇野閑人)

「死にそうなほど退屈な毎日になるぞ」

友人や同僚からそう言われた。新聞社を退社したら信州・安曇野に移住すると話したときのことだ。

「そんな田舎で何かすることあるのか」

「予定は、何もない」

「だいじょうぶか？」

なに、かまうものか。こっちは退屈で死にそうになりたいんだ——。

働きバチのように働いたわけではない。新聞社の同僚には、ものすごいワーカホリックがたくさんいた。

9年前、フランスで経済史家のダニエル・コーエン氏にパリで取材したとき、こう言われた。

「いつも自分より働こうとする人物といっしょの職場にいるのは耐えがたいだろう。君が週末に休んでいると、その間、同僚が余計に働く。で、月曜の朝までにすべての仕事をやってしまう。ボーナスを得るのは彼だし、出世するのも彼だ。恐るべきことだ」

そうだ。休日どころか睡眠もろくにとっていないように見える同僚たちに、私は恐怖心を抱いていた。それに比べれば、私は怠け者である。

とはいえ、それなりに忙しかった。九州各地でサツ回り（警察担当）をしていた若いころは、週末もたいい仕事をした。というか、させられていた。

日曜の朝、めずらしく家で寝ていると支局のデスクから電話がかかった。

「新米のくせに日曜に休むとはどういう了見だ」

「とくに事件もないようなので……」

「だったら、どっかでネタを見つけてこい！」

むちゃくちゃである。40年前の新聞社はそんな感じだった。

その後、海外で特派員をするようになった。いくつかの国を一人だけで担当する。上司がいるのは東京本社。赴任先では放し飼い状態。自由である。けれど、政治、経済から文化、スポーツまで何でも書かなければならない。EUの取材をした翌日には、ジェーン・パーキン（知ってます？）に新しいアルバムについてインタビューする。テロや戦争が起きると、現場に駆けつけ、日本との時差に耐えながら、朝夕刊の締め切りに向けて原稿を投げ続ける。

ニュースを追っているんだか、ニュースに追われているんだか。右往左往する私をローマ特派員の先輩がなぐさめてくれた。

「イタリアにいいことわざがあるんだ。働き過ぎて死ぬ人間はいるけれど、サボり過ぎて死んだ人間はいない。大野ちゃん、サボっても大丈夫だ」

だいたい勤続約 40 年で、国内外での転勤の引っ越しが 16 回。わりと忙しかったといってもバチは当たらないだろう。

だから、通勤も締め切りも会議も転勤もない日々を夢に見続けてきた。

やることが、なあんにもない——。なんてすてきな言葉だ。

そして、東京の職場をおさらばし、横浜のマンションを引き払い、安曇野の雑木林の中の一軒家に引っ越した。ついに手にする「退屈な人生」！

「やることが、なあんにもない」一日は、野鳥のさえずりで始まる、朝のコーヒーを味わいながら、窓外に目をやると、春はみずみずしい新緑、秋は燃えるような紅葉をまとった雑木林、冬には薪ストーブのゆるる炎をながめながら、東京バッハ合唱団のCDなどをかけて、美しいハーモニーに身を委ねる、はずだった……。

ところが、である。

安曇野に住み始めて一年。日々の生活はなかなか退屈にならない。

たとえば、夜、薪ストーブのゆるる炎をながめながらバッハを聴いて過ごすためには、薪を運んだり、割ったり、たきつけたり……。けっこう手間がかかる。

それにいくらか原稿書きや翻訳の仕事もある。記者時代より仕事量はずっと少なくて時間があるのに、その分ぐずぐずしてきてさっさと済ませられない。学生時代に始めたチェロに触れる余裕ができたので、レッスンに通い始めたら宿題が多い。少しはあった予定もコロナ禍でほとんど中止になり、空いた時間が増えたのに、なんだか落ち着かない。

退屈するのはけっこう忙しい。退屈している暇はない。

* * *

これからこの月報に、安曇野での悪戦苦闘などを報告していこうと思います。私の「退屈な人生」にお付き合いいただければ幸いです。

◆筆者ご紹介

大野氏はジャーナリスト。われわれの古い友人で、当合唱団を長く後援してくださっています。昨年新聞社を退職し、信州の山中に引っ越された。以前の月報（2019年11月号、第689号）に「時代と向き合うとはどういうことか——宮田光雄著『ボンヘッファー 反ナチ抵抗者の生涯と思想』を読んで」をご寄稿くださった。その折、大村恵美子によるご紹介の一文を付したので、ご参照ください（下の欄外にHP掲載バックナンバーのアドレス）。

東京での生活は、いまや見えないものに覆われ、鬱陶しい限りですが、突然、安曇野にわれわれのドッペルゲンガーが現れて、ちがう世界の空気を代わりに吸ってくれている、といった雄大な効能がありそうです。随時お送りくださるとのこと、皆様も、お楽しみください。

[編集部]

エマオの出会い

大村 恵美子

私が聖書の中でいちばん愛しているのは、この「エマオの出会い」の個所です(新約「ルカによる福音書」24; 13 以下)。イエスが処刑された3日後、弟子の2人が歩いていると、エマオという町のあたりで、かれらにイエスが出逢われたという話です。その時から、2人の弟子が主イエスの復活を信じ、キリスト教の始まりとなるのです。

「信じる」ということは、主体となる人間にとって、事情によってなかなか一筋縄ではなく、まだ経験の浅い幼児のように、即決で信じるというわけにはゆきません。人間は複雑なもので、常に同様の反応を示すものではなく、家族や友人同士のように、親しい仲であっても、接触のたびごとに、意外な反応がかえってくることもあるのです。それがわずらわしく、人嫌いに向かう人もあるし、意外な好遇に、喜んでしまうこともあります。

最近、私は続けて、若い頃に親しかった友人の消息を知らされる機会を得ました。もうこの年齢ですから、若い友人や本人のお子さん方からのお知らせで、いつ他界されたとか、今はご夫婦で施設で生活され、お会いになっても、何もわからないでしょう、というような悲しいニュースばかりです。

「ああ、恵美ちゃん、逢いたかったよ！」などの、本人の声が聴ける人はひとりもいません。私には、姉が1人、妹が1人あって3人姉妹なのですが、早くからふたりとも認知症で施設で生活しており、遠距離だったり、コロナ対策だったり、長らく対面していません。のんびり暮らしていた私が、かえって今でも普通の社会生活を続けており、成績常に優秀で人を教育する職業で社会に役立ってきた姉・妹のほうが、早くに引退してしまうのも、意外な気がします。

私は、この文書のタイトル「エマオの出会い」を、人生そのものと感じています。聖書に出てくるこの話は、現在同じ場に一緒に居て話を交わしている相手が、



■千葉写真館「早春編」③

じつは過去に知り合いだった大事な人で、初めて出会った他人かと思って話し合っている間に、段々と、あるいは、一瞬に過去の記憶をとり戻す、という例です。

「エマオ」という地名は、若いころ、初めて意識して聖書を読み込んだ時代から、何かなつかしい思い出のような名として、私の心に焼きついていました。

前号に、幼児が、おとなの、ゆきずりの私にすぐ心を開いて、いつまでも「バイバイ」をしていることなどを書きましたが(第704号、「聖書に出てくる地名、人の世の不条理」)、今でも私は、一般に人なつこすぎると誤解されやすく、親たちも厳しい顔でまず、「知らない人にはついてゆかないこと」と教えます。私も、その危険はよくわかりますが、段々成長に合わせて、警戒心を養うことは必要でも、「ひとを見たら泥棒(悪人)と思え」というのは、小さい子供には言いたくないのです。

人間についての知識は、年齢に応じて持たなければならぬのですが、自分が危険や損害を蒙るのを、警戒せずに背負い込まない注意はしながらも、自分の側からは、「あなたを信じていますよ」というサインを送りつづけなければいけないと思うのです。それが道徳心ではないでしょうか。国同士の外交でも、今は露骨に「お前の国が得をするのを、こちらは始めから許さないからな」と明言している感じで、「社交儀礼」と言われていたような、一言の挨拶すらなしに、敵対的に発言することが多いようです。

お人好ししていると国も潰れてしまうのですが、幼児のような裏表のない信頼を寄せられると、相手も自分で気づかないうちにも、まともな見方をするようになる、ということも、人間のあいだには、あり得るのです。私は、出来るだけそちら側の人間でいたい。

「あなたには騙されませんからね」と賢くそうにして他人から一目置かれるよりも、相手を信じれば、こんなに気が楽なんだ、と、海千山千の達人でも納得できるような、そういう世間になれば、ずっとお互いに住み易いのではないのでしょうか。

■ロベルト・ツェント「エマオ途上」(1877年、119×158センチ、ザンクト・ガレン美術館蔵、wikipedia)

